

論文審査の結果の要旨

氏名：NGUYEN LUONG HAI KHOI (グエン ルン ハイ コイ)

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：川端康成の美意識

－〈鏡の世界〉の考察を通して－

審査委員：(主査) 教授 久保光志

(副査) 教授 紅野謙介 教授 合田秀行

講師 佐々木健一

本論文は川端康成の美意識を、彼の藝術創造との関係で捉えるために、彼の多くの作品に現れ、重要な機能を果たしている「鏡」の形象に注目し、川端文学の全体を鏡的な構造をもつものとして示すとともに、仏教思想における鏡の比喻と重ね合わせることで、川端の美意識が根本的に東洋的、日本的なものに根ざすことを明らかにしようとしたものである。

序章では、川端が早い時期から日本の伝統と仏教への関わりを意識していたことを指摘しつつ、ノーベル賞講演「美しい日本の私」を手がかりに、仏教思想と、そこにおける鏡の比喻について考察し、それが空と悟りの心の象徴であることを、仏典なども引証しつつ解明している。その上で、川端の「鏡の世界」は、「映るもの」、「鏡面」、「かげ」のなす内的関係と、これら要素と見る主体との外的関係の二面から考察されるべきことが指摘され、これに従って以下の本論が構成されている。第一章では、先ず、鏡が重要な役割を果たす作品が取りあげられ、鏡の構造が分析される。そして、見る主体に真実を見せるという機能が取り出されるとともに、この鏡の機能がそれ以外の対象に拡張されることが指摘され、『千羽鶴』の茶碗、『みづうみ』の女性、『山の音』の女性・自然・藝術などについて議論されている。第二章は、鏡を見る自己の美醜に関わる「美的自己意識」を取り扱っている。鏡は隠れた自己の真実を見せるとともに、鏡の機能によって自己は他者から疎外されたものになるのである。第三章は、鏡の世界と無常の美意識が主題となり、仏教の観念を背景とした伝統的な無常観と川端の幼時からの死への親近が指摘されるとともに、おもに『山の音』を題材に死と生が、またその両者からの超越が問題とされており、川端の無常に対する姿勢は、芭蕉や良寛の悟った精神に属するものではなく、現代人の不安感とともに、恐怖から脱することまでが表現されていると結論している。第四章では『雪国』を題材に、鏡の世界における不二の空間が論じられている。遠景と近景のイメージが重ねられ、遠と近、生と死などの対立を超えた状態が生み出されることが鏡の空間の特徴であるが、その根底には仏教的な心が流れている。『雪国』の鏡の世界の美は「空」の性質をもち、そこには二元的な対立を超えた一元的な世界の見方を読み取ることができるのである。最後の第五章では、川端の表現法における鏡的な手法を『掌の小説』に収められた短編に即して分析している。「掌の小説」は川端文学の基礎的形式であり、短い簡潔な表現のなかに大きな内容を力強い効果で表している。この短さに制約された文学形式は、感興が一瞬で詩的様式に内在することとつながっており、新感覚派的な詩的直観を原理としている。川端はそこに東洋の一元的な考え方を読み取るのであるが、そこでは、鏡としての「主観」とかげとしての「心象」と「表現」が区別されず一つとなるのである。このようにして、鏡は、川端文学においてたんなるモチーフであるのではなく、彼の藝術的世界を支配している形象でありまた、それには東洋、日本的な仏教の心という文化的背景があると結論される。

本論文の特色は、川端康成の文学世界の全体を鏡のイメージを通して読み解くとともに、それを仏教思想の伝統と密接に関連させて論じていることである。本論文で述べられたことには、一般的な形では、また個々の論点については先行研究でも指摘されていることも多いが、本論文の独自のすぐれた特徴をあげれば、第一に、鏡的構造を川端の文学を全体として貫くものとして示し、その観点から彼の文学の全体を総体的に把握しえたことである。つぎに、川端の作品を分析するにあたって、分析を導き秩序づけるために、鏡の内的ならびに外的構造という独自の概念を提示したことであろう。これによって、分析は鏡をめぐる多面的に行うことが可能となった。最後に、鏡の比喻の仏教における思想的意味を追求し、鏡のイ

メージを軸として、川端文学の根底に潜む仏教的な「美意識」を鮮やかに取り出した点も本論文のすぐれた点として評価できる。これらの点が相まって本論文は大きな説得力をもつものとなっている。

しかし、本論文は川端の文学を鏡の形象と仏教思想とによって明快に解明している反面、川端文学がもっている近代性など、それ以外の側面についての考察が十分なされていないことが指摘されよう。また全体として一貫するものを取り出そうとする姿勢によって、川端康成の作家としての発展、個々の作品の成立事情などに対する配慮がややなおざりにされている点が目に付く。歴史的な観点からの実証と相まつことによって、議論は完全なものとなるはずである。また、仏教思想やその他の概念の定義、分析についてやや弱い部分も見受けられる。これらの諸点については、今後考察を深めるべき課題として残されていると言えるが、このことは決して本論文の卓越性を損なうものではない。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成26年1月23日